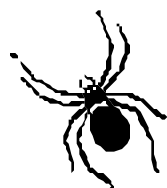




No. 3

1998 - 11 - 25

日本蜘蛛学会



トピックス

日本蜘蛛学会第30回大会
(滋賀県草津市)
開催される

1998年8月22日から23日にかけて、滋賀県草津市にある立命館大学において日本蜘蛛学会第30回大会が開催された。今回は大会の前日(21日)の午後に「クモの文化論」というテーマでプレシンポジウムが初めて実施された。その詳細については後に2人の担当者に執筆していただいたのでお読みいただきたい。

講演は17題で、初日の午後には「クモの糸の多様性」というシンポジウムがもたれた。ともすると、シンポジウムは「延長された一般講演」となるくらいがあり肝心のテーマに関する議論ができなくなることが多い。今回もこの課題は依然として残ったようだ。クモの糸という最も会員にとってなじみやすいテーマであったにもかかわらず、「活発な」討議がなされたとは言えないように感じた。しかし、以前のものと比較すればそりなりの議論はなされたように思う。時間が押して十分な議論ができなかったうらみもある。聞くところによると、来年の広島大会でもシンポジウムが行なわれると

いう。実行委員の方々にはこれらの課題に対して、少しでも改善されるように努力していただけたらと願う。ともあれ、シンポジウムの内容が充実していたものであったことは参加者の多くが実感したことと思う。来年はさらに充実したものになるように期待したい。

一般講演でおおいに興味をそそられたのは、渡部健氏の「カタハリウズグモにおける網構造の可塑性」であった。本種の網の隠れ帯には直線型と渦型が知られているが、より飢えた状態

になると渦型になった。これは、渦型の網のメッシュがより細かく、捕獲域も大きいために、多くの餌捕獲を可能にしているためだという。隠れ帯は紫外線を反射して餌を誘引しているという米国のクレイグ氏の研究と呼応して、今後この分野の研究は急展開する可能性がある。鶴崎展巨・足達珠美氏による「ヒコナミザトウムシの分散距離と交雑帯の年齢の推定」は交雑帯の幅と再捕獲法による移動距離から、交雑帯の形成年代をわりだしたもので、鳥取県大山付近の本種では213~7660年と推定されたという。評者の勉強不足でしかないが、分化の年代がこのような方法で推定できることがわかり興味深かった。

大会関係者は本大会に加えてプレシンポもあ



り、準備はさぞかし大変だったと思う。しかし、参加者はその分十分に大会を楽しむことができたようだ。あらためて感謝申し上げたい。

(新海 明)

1) プレ・シンポジウム「クモの文化論」

プレ・シンポには、延べ 60 名が参加した。学会会員が 40 名、マスコミを含む一般の参加が 20 名ほどか。斎藤さんの基調講演を聴いて、目から鱗が落ちる思いがした。そうか、クモ好きやクモ嫌いは『文化』であったのか！「いまさらなにを」という人もいるだろう。斎藤さんは以前からそう主張されており、著書にも書いておられるからだ。斎藤さんの本をちゃんと読んでいない僕は、恥ずかしながら、初めて体系的に彼の話を聞いたのである。

須賀さんの話も刺激的だった。平安時代までは、クモの出現は愛しい人がやってくる前兆として喜ばれたのに、鎌倉時代に入っていきなり妖怪変化とされたクモ。その後、能や歌舞伎などで「土蜘蛛」が取り上げられ、クモ嫌いの文化が形成されたという。「クモ合戦文化」と「土蜘蛛文化」。すっかりおもしろくなった僕は大会が終わってから、斎藤さんや故・錦先生の著書をむさぼるように読んだ。

9 月に入って僕は斎藤さんとともに、トンボ研究者の上田哲行さんに誘われて、「トンボからみた日本人の自然観」という、かなりおたくっぽいワークショップに参加した。上田さんは、「クモはいいよ、トンボに比べれば」という。日本書紀で「秋津島」(あきつはトンボの古語)と取り上げられたトンボは、その後の文献にはまったく出てこないというのだ。それに比べれば、悪役であっても様々な文献や芸能で取り上げられているクモは幸せだと。なるほど、そう

いう見方もあるか！

北原白秋がまとめた全国のトンボ方言を報告された佐賀大学の横尾さんは、九州の土蜘蛛に関する伝承をまとめ、「新備前風土記」ですでに発表しているという。彼女が調べたところでは、大和朝廷に頑強に抵抗した豪族はすべて「土蜘蛛」のレッテルを貼られたが、実のところ民衆には熱烈に支持されたレジスタンスの闘士であったらしい。妖怪を研究している(?)京都精華大学の田中さんは、プレ・シンポ「クモの文化論」で土蜘蛛伝説と中国との関係を指摘したあの女性であった！

斎藤さんと私の間では、来年の広島大会で「クモの文化論」の続編をやりようという密約が結ばれた。エンドレスでとことん、クモの文化論を戦わせようというのだ。大会の一部に含めると井原さんが大変だから、会場だけ確保してもらって、大会終了後に吉田・斎藤が自主運営する自由集会という形でやりよう。横尾さんは、「私も呼んでください」という。また楽しみができた。

プレ・シンポでは小澤実樹さんの作品とともに船曳和代さんの Web Art も展示され、プロである小澤さんの作品に劣らぬ注目を集めていた。大会の後で、船曳さんの作品を芦屋市の女性センターに展示するという企画も持ち上がっている。来年には、姫路市の科学館でクモの標本とともに Web Art を展示する計画もあるという。プレ・シンポの仕掛け人の僕としては、大会の企画だけで終わらずにこのような新たな発展の芽が生まれていることに、望外の喜びを感じている。

大会事務局として何かと忙しく、高橋さん・笹岡さん・小澤さん・中島さん、それに飛び入りの桂あやめさんの話は、残念ながら聞くことができなかった。しかし、最後に演奏された中島さんの音楽に感動して斎藤さんがぼろぼろと

泣いたというから、最高に盛り上がっていたのだろう。

2) 子供向けの採集・観察会

他方、夕方から行われた子供向けのクモ観察・採集会も大きな盛り上がりを見せた。これは地元・玉川公民館の「わんぱくプラザ玉川」の行事の一環として行われたもので、蜘蛛学会会員11名が講師を務めた。参加者は約60名。5つのコースに分かれて大学構内でクモの観察・採集を行った。

玉川小学校の女の子は、珍しいオダカグモを見つけたというので目をキラキラさせ、半ば興奮状態であった。珍しいクモの発見者として一躍みんなに注目されるという「異常な」経験は、きっと彼女の今後の成長に大きく影響するであろう。ひょっとすると10年後には蜘蛛学会会員として活躍しているかもしれない。

玉川青少年育成会会長の黒川さんと玉川公民館の福谷さんは、講師の方々の熱心さと優しさに感銘を受けていた。子供たちの様々な質問にも、いやな顔ひとつせず丁寧かつ熱心に相手してくれたというのである。他の自然観察会では、なかなかこうはならないという。これはひとえに、蜘蛛学会会員諸氏の優しさのなせる業であろう。

草津市にはいくつかの公民館があり、玉川公民館の企画だけが学会と共催し、マスコミにも大きく取り上げられたというので、他の公民館から羨ましがられているらしい。福谷さんはいくつかの小学校と中学校から、「吉田先生を紹介してくれ」と言われている由。私はもちろん、時間の許す限り、お相手しようと思っている。

はっきり言って、これらの企画を進めるのは大変だった。大会の準備委員会は9回に及び、その7割は市民向け企画についての相談だった。プレ・シンポの企画の責任者である細田みどり

さんとクモの採集・観察会の責任者だった渡部健さんは特に大変だったと思う。加村隆英さん・榎元敏也さん・榎元智子さん・金野晋さん・畑守有紀さん・田中穂積さんは、企画の相談や会場設営をはじめとする裏方の仕事に献身的に従事してくれた。この紙面を借りて、企画を支えてくれた皆さんに深く感謝するとともに、これらの企画の成功をとともに喜びたいと思う。

(吉田 真)

プレシンポから夢の絲を紡ぐ

「遊絲」編集部の新海明さんが郵便で、第30回滋賀大会プレシンポジウム実現への裏話を書けといわれる。吉田真学兄がもう関西方面へ暴露されたことなので重複を避け、最も肝心な点を記録したい。そもそもこのシンポは吉田大人の発想に始まる。クモで文科系シンポジウムを、との提案を受けたとき、一本とられたとぼくは思った。学際的なクモ博物館を創りたいとかながね考えながら、シンポは思いつかなかった。吉田氏の手紙を読みつつ、これは博物館への第一歩になるかもしれないと胸が躍った。すぐ小澤兄に便りをしたためたが、ぼくの思つきは支離滅裂。構想創りはご多忙な小澤兄に全面依存してしまった。小澤さんの返信(第一信)には、本番プログラムとほぼ同じ内容が整然と盛られていたのでびっくりした。つまり仕掛け人は吉田兄、知恵者は小澤兄で、ぼくは恥ずかしながらお喋り雀でしかなかった。同時に現われたのがプレシンポ担当の細田みどりさんだ。細田さんからはキメ細かい配慮に満ちた手紙がジャンジャン届く。のんき坊主のぼくは小澤さん・細田さんのお便りに励まされて腰を上げたようなものだった。

パネラーの陣容は笹岡文雄氏(日本と外国の

国柄に見るクモの玩具), 船曳和代氏(クモの網の標本づくりの秘話/展示会), 須賀瑛文氏(クモ・話の泉/日本古典に現われたクモ), 高橋登氏(クモ学資料に見るクモの写真史), 小澤實樹氏(クモの形態デザイン/展示会), 中島はる氏(クモの音楽/クモをテーマにした洋楽の話/中島はる作曲の歌曲「蜘蛛の子」とピアノ曲「クモの糸のはしご」鑑賞)とまことに豪華絢爛。クモを愛する落語家・桂あやめさんが会場へ駆けつけて下さり, 会はいっそう盛り上がった。この企画を陰で背負って下さった大会スタッフの皆様にもここで深く御礼申し上げたい。

船曳さんは本番に先立ち, 草稿と共に見事なジョロウグモの網標本(新品!)をプレゼントして下さった。クモの網の美しさと船曳さんの感性(および執念)が一体となった標本の展示を見て, これは小澤さんの言葉だが「まさに芸術品」だと唸った。中島さんの「蜘蛛の子」の詩の朗読がやがてメロディへと移行するユニークな歌曲で, 身がふるえるほど感動した。笹岡さんのクモグッズは喉から手がでるような逸品揃い。クモの玩具を産み出す人たちの視点の分析が光っていた。須賀さんは日本古典文学に現われるクモを通して, 古代的なクモの善玉論が鎌倉時代にクモを邪悪とする思潮に変わることを指摘した。高橋さんは和漢三才圖会を枕に, 近代クモ学者の著した希覯本を紹介。文理両道に橋渡しをした。小澤さんのクモのデザインは今さらばくご紹介するまでもないが, クモの象徴的なデザインが, すべての科学的根拠に立脚しているところが流石である。ぼくはクモ合戦の民俗をざっと述べた(大阪千早赤阪村のコガネグモ方言「ハナグモ」は斯界初報告)。シンポの内容を本にできたら素敵だが, よい版元が現われないものだろうか?

パネラー諸氏はまだ語り足りないと思うし,

今回語られなかった会員にも「クモの文化」に一家言をお持ちの方が大勢おられよう。これを機に学会に「クモの文化部会」を結成してはいかがだろうか。そうしていつかこの続きを語りあえたら楽しい。また冒頭にも触れたが, どこかに「クモの文化博物館」がほしいですね(第一候補は鹿児島県加治木町?)。船曳さんのクモの標本室や, 小澤さんのデザイン室, 笹岡さんのクモグッズ室はもう展示物が相当ある。館内には中島さんの音楽が流れ, ビデオでマメイタイセキグモやオナガグモの捕り物も見られる……この夢が実現するのはいつの日のことだろう。

(斎藤晋一郎)



同好会情報

日本には日本蜘蛛学会だけでなく, 各地に同好会がある。ここでは, そこで行なわれる採集会や講演会, そこで発行される定期刊行物などの活動内容を紹介する。興味を持たれた方はぜひ入会して, 行事などに参加されてはいかがだろうか。

中部蜘蛛懇談会(代表:村上 勝)

会報「蜘蛛」を年1回, 「まどい」を年3回発行。採集会・例会を年数回実施。

今年度の総会・研究会は, 1999年2月11日(木)に予定。

蜘蛛(KUMO)30号(1998.2.11発行)
中部蜘蛛懇談会会報「蜘蛛」第30号記念
内容は, 遊絲2号を参照して下さい。

入会申し込み

444-0930 岡崎市東大友町字松花 86-1-103
板倉泰弘(事務局) Tel 0564-34-2753

会費 正会員 年 2500 円 高校生以下 1000
円)

準会員 「まどい」のみ 500 円

三重クモ談話会(本部:太田定浩)

会報「しのびぐも」を年1回発行.採集会・
合宿・例会などを年数回実施.

今年度の採集観察会は,1999年3月21日
(日)JR伊勢柏崎駅10時集合 参加希望者は
事務局まで連絡のこと

総会兼採集会は,1999年3月21日(日)に
予定.

しのびぐも 25号(1997.12.31発行)

内容は,遊絲2号を参照して下さい.

入会申し込み

515-0044 三重県松阪市久保町 1843-157
貝發憲治(事務局)

会費 年 1500 円

和歌山クモの会(会長:米田 宏)

会報「和歌山クモの会会報」を年1回発行.
総会・観察会を年1回開催.

和歌山クモの会会報 No.8(1998.7.8
発行)

東條 清:春日の森のクモ類

米田 宏:クモに関する迷信や伝説(5)

東條 清:こんなところにジョロウグモが産卵

稲垣成二:和歌山クモの会総会と観察会

入会申し込み

642-0002 海南市日方1156

東條 清(事務局)

会費 年 500 円



東京蜘蛛談話会(会長:萱嶋 泉)

会報「KISHIDAIA」を年2回,「談話会通信」
を年3回発行.採集会年4回・合宿年1回・総
会例会などを年2回実施.

今年度の採集会は,1999年2月21日(日)
埼玉県飯能市天覧山 西武池袋線飯能駅北口階
段下午茶前10時集合(時間厳守)

合同例会は1998年12月6日(日)午前10
時より国分寺市本多公民館にて.

KISHIDAIA 74号(1998.3.31発行)

宮下和喜:ナカムラオニグモの卵のう産出と幼
体発育

新海 明:ミナミノシマゴミグモによる円網の
修繕

小笠原幸恵:飼育下におけるトガリクサチヒメ
グモの網型と卵囊について

谷川明男:ジョロウグモの造網場所移動の観察
とオオジョロウグモとの比較

DRAGLINES

新海 明:降雨時のジョロウグモの網

新海 明:ジョロウグモで見られた降雨後の
網の張り替えのパターン

谷川明男:餌をひきずって網の上を歩いたオ

オジョロウグモの幼体

新海 明・池田博明・谷川明男：東京蜘蛛談話
会 1997 年度合宿報告 沖縄県名護市周辺の
クモ

新海栄一：クモ類による環境の評価

KISHIDAI 75 号 (1998 . 8 . 30 発行)

鈴木 裕・安田明雄：麻酔したクモに対するネ
コハエトリの求愛行動

池田博明・中山美和・稲葉茂代：神奈川県平塚
市の越冬期メガネヤチグモ 上吉沢個体群

梅林 力：クモも遊ぶか，トレーニングするか

小笠原幸恵：ヤホシサヤヒメグモ *Coleosoma*
octomaculatum の体色変化とエサの関係

池田博明：ヒロセハエトリを求めて

谷川明男・池田博明：イオウイロハシリグモの
飼育記録

新海 明：落葉落枝に支えられた円網の記録

DRAGLINES

安田明雄：横浜市でのアカイソウロウグモの
記録

平松毅久：船橋県民の森にオオクマヒメドヨ
ウグモ

新海 明：オオジョロウグモの給水の観察

新海 明・金野 晋：東京八王子でスズミグ
モの網を発見

谷川明男：標本ラベルについて

梅林 力・井上房江・小澤實樹・熊田憲一・松
浦祐司・松本誠治：東京都杉並区のクモ相

入会申し込み

350-0816 川越市上戸 91-3 瀬尾荘 202

平松毅久 (事務局)

TEL 0492-33-8792

会費 年 2800 円 (学生 2000 円)

関西クモ研究会 (会長：山野忠清)

会報「くものいと」を年 2~3 回発行。採集

会・研究会例会などを年数回実施。

今年度の採集会は、1999 年 3 月 21 日 (日)
を予定。場所は、大阪府南部あるいは和歌山県
北部方面。

例会は、1998 年 12 月 13 日 (日) に大阪市
の四天王寺高校で実施。

くものいと 24 号 (1998 . 8 . 10 発行)

東條 清：関西クモ研究会採集会報告

西川喜朗：中国大陸探蛛行

山野忠清：滋賀県の採集会

坂口佳史：滋賀県の採集会

赤松史憲：初めての採集会

船曳和代：採集会の感想

吉田 真：チーちゃんて誰や

吉田 真：虫は不快か友達か

吉田 真：プレ・シンポ「クモの文化論」が実
現するまで

その他 雑誌，新聞記事からの転載情報

入会申し込み

567-0008 茨木市西安威 2-1-15 追手門学院

大学生物学研究室内 関西クモ研究会

Tel 0726-43-5421 (内線 5113 西川研, 5106

加村研) Fax 0726-43-5427

会費 年 1000 円

関西クモゼミ

毎月 1 回，第 2 か第 3 土曜日か日曜日に滋賀
県草津市の立命館大学で開催。

会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 立命館大学理工学部生物地球科学研

吉田 真 TEL0775-61-2660

東京クモゼミ

毎月 1 回，第 1 日曜日に東京大学農学部の宮
下研，または神奈川県立七里ガ浜高校で開催

会費などなく誰でも参加できる。

東京クモゼミ報告（プリント）を配布。
連絡先 新海 明 TEL042-522-2605

（新海 明）

言いたい！聞きたい！



偏見に注意．

でも思い込みを持って採集しよう

この夏に行なわれた東京クモ談話会の秩父合宿で「な、なんとシノビグモ」が採集された．このクモは中部地方にしか生息していないものと信じ込んでいたので（遊絲 2 号の採集情報に秋田県で福島さんが、Kishidaia (69) で北海道からは谷川さんが報告していたのだが）、採れたときには半信半疑だった．オスの垂成体だったので、谷川さんが持ち帰って成体にして正真正銘のシノビグモであることがわかった．採集したのは今井正巳さんで、談話会に入会して 2 年に満たない新人である．山腹の小さな水場のコケの間にいたとのこと．私などこの水場に何度も足を運んだのだが、冷たい湧き水ばかりに気をとられクモの存在など全くわからなかった．あとになって、その気になって皆でその水場を探すと 3~4 頭もの幼体が採れたではないか．「ああ、ユアギグモのときもそうだったのに」と反省した．20 年以上も通っていた千葉県房総丘陵の林道で、ある時にわんさか採れたのだ．これも発見者はその頃に談話会に入ったばかりの平松さんだった．通い慣れた、そして知り尽くしているという偏見が採集する「目」を曇らせているのだろう．その後、全国各地を回るとユアギグモに注意すれば、なんとどこにもでもいるではないか [Kishidaia (67) 参照の

こと]．「まさか、秩父にシノビグモがいるなんて」と思ったこと自体が大いなる偏見であろう．初心者のような純な気持ちにはもうすでに戻れないようなので、せめて身に着いた「偏見」を、「ここにはいないと思っていたクモでも探せばいるかも知れない」という「思い込み」に替えて、採集会に臨もうと思う．偏見と思い込みとは五十歩百歩でどこが違うのと問われれば答えようもないが、ユアギグモのときと同じで信じて探せば、日本全国そこかしこにシノビグモも見つけられるに違いない．

付記

これが関東地方でのシノビグモの初記録と思っていたら新海栄一氏が 1988 年 6 月 19 日に群馬県谷川岳のマチガ沢出会いで、すでにの垂成体（その後、成体となる）を採集していたとのことである（新海栄一氏、私信）．採集した記録は確実に残しましょう．

（新海 明）

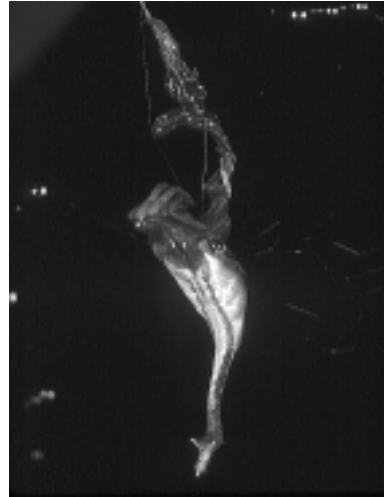
西表クモ談話会奇行（1）

クモ屋の世界では西表島の主として自他共に認める谷川明男氏のお世話で、念願の西表へ行くことになった．名付けて「西表クモ談話会」．参加者は谷川氏、新海 明氏、筆者の 3 人であるが、現地集合で行きも帰りもバラバラ、ただし現地の案内は谷川氏にお任せという気楽の上ない旅である．先発の私は 8 月 12 日の午後 5 時少し前に約 10 時間かけて西表の土を踏んだ（もっとも船着き場は下がコンクリートだったが）．夕方にもかかわらず南国の太陽光線は強烈である．例年お盆の時期は先祖の霊が台風という招かれざる？客人を連れてやってくる人が多いようだが、今年は台風はおろかしばらく雨らしい雨さえ降っていないらしい．谷川氏の定

宿「うえはら館」に着き宿帳を書いていると、目的欄の「観光」という文字を目敏く見付けた。明るいおかみさんが「クモ採集も観光のうち？」と笑いながら尋ねた。どうやら先刻ご承知のようだ。

夕食前に近所で採集することにした。昨年の東京蜘蛛談話会沖縄合宿からある程度予測はついていたが、夏枯れのせいかクモが少ない。数分後低木の葉を二重に巻いた中にシルエットが見えたので開けて見ると、ハエトリグモのものと似たような住居があり、その中に黒褐色のクモが簡単に糸でかがただけの卵のうを口にくわえていた。丸い頭胸部からヤマシログモの1種とわかった。その他ではシロカネグモやオナガグモの幼体しかおらず、夕食の時間も近付いたので宿に戻ろうとすると、通称ハイビスカス（ハイビスカスというのはフヨウ属の属名で、特定の種を表す名ではないらしい）の葉の上で西表島と石垣島にのみ生息するクロカタゾウムシが交尾していた。鞘翅が堅く腹部背面に癒合して飛べないというのがよくわかった。夕食後は疲れていたのでシャワーを浴びてすぐ寝た。

翌13日も朝からカンカン照りである。朝食を済ますと歩いて採集に出掛けた。とにかく暑い。ひなたはクモも暑いからいないだろうと日陰の藪でチンタラやっていたが、名前がわかったのはリュウキュウツクネグモぐらいであとは見慣れないヒメグモやハエトリグモの仲間が数頭採れたぐらいである。そうこうするうちに昼近くになり昼食にしようかどうしようか迷っていると、数匹のベッコウチョウトンボが梢を舞っている。これに導かれるように小道へ入ると、褐色型のキオヒキグモが体長に比して小さい網（タテ13cm×ヨコ11cm）を張っていた。開こしきのキレ網で、クモのすぐ上には同じよう



褐色型のキオヒキグモ

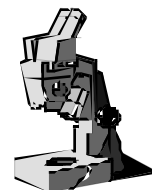
平松さんが観察された個体ではない（谷川明男）

な色の枯葉が2枚あった。枯葉はクモが占座する位置の上方約60°にあるヨコ糸のない2区画を区切るタテ糸とワク糸の間にあり、カムフラージュの役を果たしているように見えた。

昼食後は近くの電波塔がある小山へ登ったものの収穫は殆どなし。ただ暑くて滝のように汗が出ただけであったが、山道から見える碧くまばゆい海と道端に咲く白地に赤紫のコントラストも鮮やかな一輪のナリヤランが乾いた心を潤してくれた。

帰ってシャワーを浴びてから洗濯していると谷川氏が到着していた。本島のやんばるで採集された見慣れないキシダグモ科のクモを見せていただく。夕食後は歩いて近くを採集後海辺でヤシガニを探すも空振り。帰って早目に就寝。翌日以降が本番である。

（つづく）
（平松毅久）





ムツトゲイセキグモ「ムッチャン」

- 飼育日数 176 日間 -

溺死しかけたムッチャン

1997年8月29日、立命館大学の吉田先生が投げ縄をする珍しいクモが手に入ったので飼ってみないかといわれ、シール容器に入れて喜び勇んでもらって帰った。ところが、家に着いてふたを開けてみると、ムッチャンはぐったりとしている。「ムッチャン、ムッチャン」と呼んでも返事がない。原因は持ち帰るときムッチャンが乾燥しないようにと、シール容器に入れた濡れたティッシュペーパーだった。ティッシュから流れた水で、おぼれてしまったのである。もう頭の中は真っ白。「かわいそうなことをして、ごめんね、ごめんね」と、泣きながらムッチャンの体を拭いたが、30分経っても、1時間経ってもムッチャンはピクリとも動かない。

「もう死んでいるよ。アルコールに入れよう」と夫。しかし、あきらめきれない私は「人間でも24時間おくんやからもうちょっと待って」と頼む。せめて写真でも撮っておこうと、撮影をしていると、足ががすかに動いたのである。「生きてる！」そのときのうれしさは、砂漠でオアシスに出合ったような気持ちだった（経験ないけど）。それからさらに1時間ぐらいかかって、ムッチャンは仮死状態から完全に復活したのである。

お家はススキの葉っぱ

さて、ムッチャンの飼育だが、ムッチャンがススキの葉の上で見つかったと聞いていたので、ススキにこだわった。まず、ペットボトルを下3分の1ぐらいのところで切り、その中に、フラワーアレンジメントで使うオアシスというスポンジ様の物を入れ、ススキの葉を挿してムッチャンをとませた。ムッチャンはお利口なので、ササッと逃げることはないが、そのままでは、いなくなってしまうそうなので、上からメッシュカゴを被せた。その後、いろんな話を聞くと別にススキでなくてもよいということだった。

問題のエサであるが、ムツトゲイセキグモはご存じのとうり「ガ」食だ。投げ縄でガを捕るのは分かっていたが、狭いカゴの中で果たして捕れるかどうか不安だったので、はじめは手でやった。ガを口元に持っていくと、腕を伸ばして「ちょうだいちょうだい」をして、ちゃんと受け取る（こんなかわいいクモ、他にいます？）。受け取ったガを上手に糸でぐるぐる巻きにして食べ、残りは下に捨ててしまう。

投げ縄で、ガをゲット

次にカゴの中にガを数匹入れて、自分で捕らせることにした。部屋を暗くすると（夜中だから、電気を消したということ）、横移動しながらススキの葉に糸を張り、そこから下にツツツと降りてきて、体を揺らしながら投げ縄を始める。粘球は結構大きい。ガが飛ぶと腕を激しく動かし、ガが止まると休む。そうこうしながら、最後にはちゃんとガを吊るのである。羽を糸に引っかけバタバタしているガに上手に糸をかけ、ぐるぐる巻きにし、宙ぶりのまま食べていた。この日はたまたま電気をつけても、投げ縄を続けたが、基本的には明るい投げ縄はしないよ

うだ。私たちは、何度か夜中に投げ縄を見たが、たいていは翌朝、ミイラのように巻かれたガが落ちていたのを見て、昨夜ムッチャンが食事をしたことを知るのでした。

はじめはどの種類のガがいいのか分からなくて、いろいろ入れてみたが、結局、体調1~2cmぐらいのベージュ色の羽のガが好物のようだ(名前が分からない)。もちろん、投げ縄は、いつもうまくいくわけではないようで、何日も食べてないこともあった。ガの密度が関係あるのかもしれない。ムッチャンの投げ縄を見ていると、ガが粘球に引き寄せられている風には見えない。むしろ、むなしく空を切っていることが多く、あまり効率がよいようにも思えない。ガのフェロモンに似た匂いで惹きつけるそうだが、こういう飼い方ではよく分からない。

秋から冬にかけてはエサの調達がたいへん

9月末ぐらいまでには死んでしまうよ、といわれていたムッチャンは、10月に入っても生き続けた。このころになると、次第にエサのガを調達するのがたいへんになってきた。ガを探して、よその家の塀や植え込みをジワッと見ながら歩いている姿は、我ながら怪しい。そんな私の努力もムッチャンはどこ吹く風。ガの種類が気に入らないのか、だんだん食欲がなくなって、ガを口元に持っていても「ちょうだい、ちょうだい」もしなくなった。

人なつかかったのに「おいで」と言って指を出してもケージにへばりついて動かなくなった。無理に移動させようとすると、いやがるようになり、動きも鈍くなっていく。

それでも12月30日には、目の前に持っていったガをちゃんと受け取って食べた。エサを食べた翌日は、糸を出してぶら下がって、ガがいたら喰ってやるゾ、という姿勢で待機している。

まだまだ食べる気十分。エサさえ食べられたらまだまだ生きるのではないか。淡い期待を抱いたが、いかんせんガがない。飢え死させるのだけはかわいそう、とまた、ガを探して歩く。

ペットグモ「ムッチャン」

1998年が明け、ムッチャンはとうとう年を越した。毎朝、夫がムッチャンの安否を確認する。私は怖くて、見る事ができない。横から「生きてる?」と聞き、「大丈夫、生きてる」というのを聞いて安心する毎日だ。エサがとれなくなるのと同時に、ムッチャンも動かなくなってきた。ガを与えてももう受け取らない。そういう状態が2月半ばまで続いた。寒さがゆるんで少し温かくなった日、ムッチャンが動き始めた。また、元気になるのかなと思っていたら、2月20日とうとう死んでしまった。

ムッチャンは卵囊を吉田先生のところでひとつ、うちでひとつ作ったが、どちらも孵ることはなかった。わが家に来て半年、ムッチャンは吉田先生とNHKテレビに出演したり、私の趣味の写真のモデルになったりもした。家にムツトゲという珍しいクモがいることを知っている友達からは、会う度に「ムッチャン元気?」と聞かれたりもした。

ムッチャンはわが家のペットグモとして、たくさんの思い出を作ってくれた。ムッチャンは、ムツトゲイセキグモ長生き記録でクモギネスということだが、私にとっては「かわいいクモナンバーワン」でクモギネスなのである。

(榎元智子)



10年生きたキシノウエタテグモ

1980年自宅屋外に置いてあったトウカエデの鉢植えの中に、自然営巣したキシノウエタテに給餌をするという形で飼育を始めた。鉢はそのまま屋外に放置したので、栄養状態以外の環境は自然のままであった。その後同じく自然営巣したものをこの年から1996年まで、毎年個体数の増減はあるもののこの条件で連続して1~11頭飼育した。そしてその内1番最初に給餌を始めた個体が1989年に行方不明となるまで10年、また1982年に発見し給餌を始めた1頭が1991年死亡してこれも10年生きた。そしてその2頭はともにこの個体であった。これらのクモ2頭は共に、その営巣を確認した時点ですでに住居の蓋の直径は5mm強ほどであった。キシノウエタテは親の住居から分散した2齢から自らの住居を造るが、その時の住居の蓋の直径は約2mmある。したがってその大きさは飼育下の幼体の成長から推定して、少なくとも親の住居から分散してから1年以上は経過しているクモのものと推定された。これから考えるとこの飼育による年齢より、さらに2年は加算が可能と思われる。しかしこれらはあくまで飼育下の結果であり、自然においてはこのように長く生きることは稀なことかも知れない。

(笹岡文雄)



キシノウエタテグモ



ゼミ

ハエトリグモの論文再読(3)

Jocelyn Craneのハエトリグモの研究(上)

ハエトリグモの雄は雌の前で種特有の求愛ダンスを行なう。この求愛ダンスは有名で、ダーウィンも性選択の例として取り上げていた。ハエトリグモの求愛ダンスについて、種ごとに徹底的な比較研究を行なったのはアメリカのジョスリン・クレインであった。彼女が1949年に発表した論文「ヴェネズエラのランチョ・グランデのハエトリグモの比較生物学。第4部・誇示行動の分析」はハエトリの誇示行動の研究論文として、必ず引用されるものである。ちなみに、クレインの名前は高校生物の参考書にも見られるが、そこで引用されている論文は、ハエトリグモの誇示行動に関するものではなく、シオマネキの誇示行動の方である(Crane 1957)。

クレインの消息

ハエトリグモやシオマネキの誇示行動の研究で、めざましい成果を上げたジョスリン・クレインだが、彼女のその後の消息は不明であった。私は彼女のバイオグラフィが無いかと探してみたが、分からなかった。事情はアメリカでも同様であつたらしい。今年1998年7月に、インターネット上「ARACHNOLOGY」のメーリング・リストでデイヴィッド・リッチマン(ニュー・メキシコ州立大学、ハエトリグモの研究者)がドナルド・グリフィンと結婚した彼女の消息を尋ねたのであった。ドナルド・グリフィンはコウモリのエコー・ロケーションの研究で有名な動物学者であり、彼の著書は『動物に心があるか』(岩波書店、誤訳かつ悪訳!)、『動物は何

を考えているか』(どうぶつ社)の2冊が翻訳されている。どちらの本にも、クレインのシオマネキの誇示行動の仕事が引用・解説されていたが、クモの誇示行動の仕事についてはまったく触れられていなかったし、参考文献にも挙げられていなかった。クモ研究者としては、彼女の立派なクモの仕事が一般に知られないのは、残念なことである。さて、メーリング・リストでは早速、返信があった。

レイスキンド博士(フロリダ大学)が1962年に会った頃のクレインは、トリニダードのシムラにあるニューヨーク動物学会の野外基地の実験室長として働き、シオマネキの研究をしていたという。恩師のウィリアム・ビービ博士が亡くなった直後で、彼女はそのショックから立ち直っていなかった。グリフィンがハーバード大学で一般生物学を教えていて、トリニダードではウオクイコウモリの研究をしていた。クレインとグリフィンは1960年代末か、1970年代初頭に結婚したのだという。しかし、レイスキンド博士にもクレインの現況は分からなかった。

クレインの現況を伝えたのは、ウィリアム・ピール博士(ハーバード大学)だった。夫妻は今も一緒に、クレインは92歳くらいだという。夫のグリフィンは、2年前には、数人のハーバード大学のシニア課程の学生に研究課題について助言したり援助したりしていたという。メーリングリストに出たクレインの情報は、これだけであった。私が、彼女の有名な論文を初めて読んだのは1972年頃であり、ちょうどグリフィンと結婚した直後ということになる。今年が92歳なら、西暦の年号から6年を引けば、彼女の年齢が出るので、彼女が結婚したのは60歳代ということになった。彼女がまだ存命だったことが分かって、私は、なんだかホッとした。

クレインのクモの論文

クレインが最初にクモに関する論文を書いたのは1943年である。この論文(新種8種の記載を含む分類学的なもの)のもとになった探検は、ビービ博士の指揮のもと、英領ギアナで1917年から1924年までの間に6回、ヴェネズエラで1942年に行われたという。彼女の肩書きは、ニューヨーク動物学会熱帯研究部の動物学研究員であった。年齢から推察して、彼女は英領ギアナの探検には参加していないはずであった。彼女の最初の論文は中米の西海岸のシオマネキに関する報告であった(1941年)と思われるが、クレイン自身の言葉によれば、ヴェネズエラの探検以降は、熱帯のハエトリグモに関して、生活史などの研究を充実させようという意図で、積極的にデータを収集したという。クモに関するクレインの第2論文も既知4種と新種3種を記載した分類学の論文であった(1945年)。

第二次世界大戦後、ニューヨーク動物学会はビービ博士の指揮で、ヴェネズエラのランチョ・グランデで調査を行なった。この遠征から、クレインの「ハエトリグモの比較生物学」という全5篇の論文(1948-1950年)が生れた。私は今回、有名な第4部だけでなく、全5篇を購入して読んでみて、最初から彼女が明確な仮説を持って研究していたことを理解した。まず、38頁の大論文「第1部 *Corythalia* 属の分類学と生活史」(1948)を紹介しよう。

ハエトリグモの比較生物学 第1部

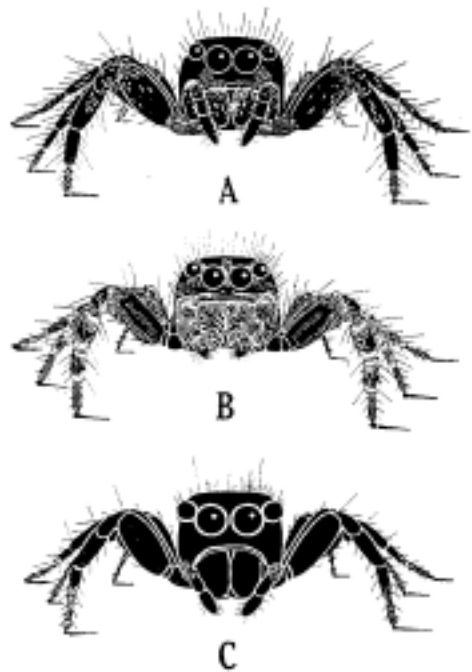
彼女は1945年に40種以上のハエトリグモの令期や誇示行動を精力的に調査し、翌年にはこれらのうち6種のクモの生活史を集中的に調査したという。最初に *Corythalia* 属の新種3種についてまとめた理由は、この属のクモの数が多かったことと、そのうちの1種の室内飼育

に成功したこと，色彩変化や誇示行動に特徴があり，進化的に重要と考えたからであったという。「進化」への関心は，「第2部・研究の方法」（1948年）にも，以下のようにはっきりと述べられていた．

“熱帯のハエトリは理想的な実験動物である．行動の多様性や非常に近縁な形態と関連する構造は，進化の基本的な問題を研究するのに，特に興味深いものである．熱帯のハエトリは飼育に適しており，その基本的な行動型は室内でも野外でも違いがない．”ローレンツやティンバーゲンなどが鳥類や魚類の行動分析から立てた，生得的解発機構（生まれつき動物が持つ刺激に対する定型的な反応のメカニズム）を，ハエトリグモでは，多様な属の誇示行動を比較することが出来る．この研究の“究極の目標はふたつである．ひとつめは，特に機能と構造の関連に注目して，科内で進化的なパターンを明らかにすることである．ふたつめは，科内の生得的解発機構と遠縁のグループのそれを比較し，相互関係を調べることである．”

「第1部」の論文で，クレインは *Corythalia* 属の定義を明瞭にしようとした．徹底的にクモの検討が行なわれ，成体ばかりでなく幼体の各部（色，形，棘，頭胸部や脚の刺毛，トリコボスリア，符節の爪など）の特徴と，生殖器・行動・生息地等のくわしい記載をした後で，種毎の記載をしていた．ちなみに，クレインが記載したこの属の3種 *C. chalcea*，*C. fulgipeda*，*C. xanthropa* のうち，*C. fulgipeda* は既知種 *C. tropica* (M.-Leitao 1939) であることが，その後に分かったが，彼女が中南米で記載した新種のほとんどは，現在でも有効学名である．

Corythalia 属の3種の誇示行動は種特異的なものであった．たとえばオスの求愛誇示では，*C. chalcea* のそれは高く保持し，第3脚をふり



Corythalia 属雌成体の正面．

A, *C. chalcea*, B, *C. fulgipeda*, C, *C. xanthropa*

(Crane 1948 より)

あげてまっすぐ伸ばすものであるが，*C. fulgipeda* (= *C. tropica*) は体を低く，脚は側方へ広げられ，第3脚は断続的に上げられるといった具合である．*C. xanthropa* は第1脚をふり上げる．ここで，例示したのは3種のメスを前から見たときの様子である．有名なこれらの図を描いたのはクレイン自身ではない．ランチョ・グランデのケネス・ゴスナー氏であった．一部の図はパメラ・マーモン嬢が描いていた．微に入り，細に入り，行動の記載がされていた．ところで，肝心の解発機構や誇示行動の機能に関する実験的研究については続編にゆずると記されている．いわば満を持して，第4部が書かれるのであった．

References

Crane, J. 1948. Comparative biology of salticid spiders at Rancho Grande, Venezuela. Part I. Systematics and life histories in Corythalia. *Zoologica*, **33**:1 - 38.

Crane, J. 1948. Comparative biology of salticid spiders at Rancho Grande, Venezuela. Part II. Methods of collection, culture, observation and experiment. *Zoologica*, **33**:139 - 145.

(池田博明)



日本各地で採集された，稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する．

サカグチトリノフンダマシ

神奈川県津久井郡城山町 1998年4月26日幼

1 大川秀治

アオグロセンショウグモ

神奈川県津久井郡城山町 1998年6月23日

成体1 大川秀治

シノビグモ

埼玉県秩父郡大滝村東大秩父演習林 1998年

7月26日 亜成体1 幼体3 今井正巳他

カトウツケオグモ

埼玉県児玉郡神泉村矢納城山公園 1998年9

月25日 南部敏明

(新海 明・平松毅久)



最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のある論文をいくつか簡単に紹介する．

Logunov, D.V. 1998. *Pseudeuophrys* is a valid genus of the jumping spiders (Araneae, Salticidae). *Revue Arachnologique*, 12 (11): 109 - 128.

Euophrys の新参シノニムとされていた *Pseudeuophrys* を独立属として復活させた．日本産の種では *Pseudeuophrys erratica* (Walckenaer 1826) ヤガタハエトリと *Pseudeuophrys iwatensis* (Bohdanowicz & Prószyński 1987) イワテハエトリがあつかわれている．

Shimojana, M. & J. Haupt 1998. Taxonomy and natural history of the funnel-web spider genus *Macrothele* (Araneae: Hexathelidae: Macrothelinae) in the Ryukyu Islands (Japan) and Taiwan. *Species Diversity*, 3:1 - 15.

南西諸島および台湾から5種のジョウゴグモを報告した．台湾産の *Macrothele holsti* Pocock 1901 ホルストジョウゴグモを再記載し，台湾産 *Macrothele taiwanensis* Shimojana & Haupt 1998 キールンジョウゴグモ，西表島・石垣島産 *Macrothele gigas* Shimojana & Haupt 1998 オオクロケブカジョウゴグモ，奄美大島・徳之島産 *Macrothele amamiensis* Shimojana & Haupt 1998 アマミジョウゴグモ，西表島・石垣島産 *Macrothele yaginumai* Shimojana & Haupt 1998 ヤエヤマジョウゴ

グモの4新種を記載した。

Mikhailov, K.G. 1997. A revision of the Chinese sac spiders of the genus *Clubiona* described by E. Schenkel in 1936 (Aranei Clubionidae). *Arthropoda Selecta*, 6(3/4): 87 - 93.

Schenkel (1936) が記載した6種のフクログモを再記載した。Schenkel が記載した *C. hedini* は *Clubiona jucunda* Karsch 1878 ヤハズフクログモであり, Zhang (1991) が *Clubiona chikunii* Hayashi 1986 チクニフクログモを *Clubiona propinqua* (= *C. pseudogermanica*) のシノニムとしたのは誤りである。

Marusik Y.M. & D.V. Logunov 1997. Taxonomic notes on the *Evarcha falcata* species complex (Aranei Salticidae). *Arthropoda Selecta* 6(3/4):95 - 104.

ホオジロハエトリを *Evarcha proshynskii* Marusik & Logunov 1997 の名のもとに新種として記載した。

Tanikawa, A. 1998. The new synonymy of the spider genus *Argyrodes* (Araneae: Theridiidae) and a description of a new species from Japan. *Acta arachnol.*, 47: 21 - 26.

Spheropistha クロマルイソウロウグモ属を *Argyrodes* イソウロウグモ属の新参シノニムとし, クロマルイソウロウグモをイソウロウグモ属に移動した *Argyrodes miyasitai* Tanikawa 1998 ミヤシタイソウロウグモを新種として記載した。

Ikeda, H. 1998. Spiders of the genus *Laufeia* (Araneae: Salticidae) from Japan. *Acta arachnol.*, 47: 37 - 43.

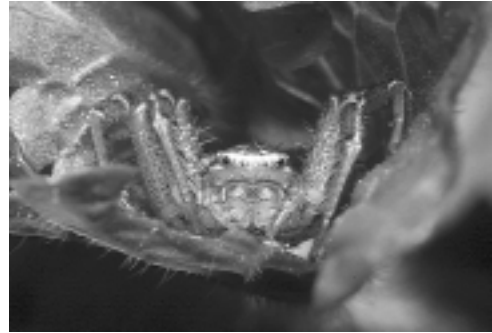
Laufeia sasakii Ikeda 1998 トクノシマエキ

スハエトリを新種として記載した。

(谷川明男)



ギャラリー



Xysticus croceus Fox 1937

ヤマイロカニグモ

カニグモ科のクモは正面から見るとけっこうユーモラスな顔をしています。もちろんこの状態では同定できません。採集して確認しました。

(谷川明男)



原稿募集中

「遊糸」の原稿を募集中です。ちょっとした観察記事(短報), 会員に広く知ってもらいたい情報(総説), 採集記録, 文献紹介, 各地の同好会の催物情報, 研究上の標本や資料募集の記事等など, なんでも構いません。こんなコーナーも作って欲しいという希望があれば, それもOKです。会員の皆様のご協力を是非お願いします。

投稿にあたってのお願い

1. 原稿はクモ形類・多足類に関することならな

んでも構いません。

2. 字数制限はありませんが、あまりに長文の場合は削除や分割での掲載をお願いすることもあります。

3. 原稿はワープロ、手書き原稿、はがき、E-mail などなんでも構いません。

送付先

190-0022 立川市錦町3-12-16-1103

新海 明まで

E-mail は dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp (谷川明男) まで

発行は、年2回(5月、11月)の予定。締切は発行月の前月末日です。



遊絲 1・2号 (1997.8~1998.7) 会計報告

収入

寄付	74,402 円
1号売上げ	190 円
学会補助	5,240 円
合計	79,832 円

支出

遊絲 1号送料	23890 円
遊絲 2号送料	20960 円
紙・封筒・プリンターナー	34640 円
小計	79490 円
次号繰越金	342 円
合計	79832 円

(新海 明)



編集後記

遊絲発行から1年が過ぎました。今夏の大会でも遊絲発行へと54,877円のご寄付をいただきました。本当にありがとうございました。幸い学会の会計状況も好転しつつあるようで、遊絲への援助も増やしていただけるようです。財政はクリアできたようですが原稿のほうは相変わらず思うように集まりませんでした。そこで、今号から依頼原稿を少しずつ増やしはじめました。お書きいただいた皆さんに御礼申し上げます。編集者としては一例報告などの身近な観察記事がもっと多く集まるようにと念じています。どんな内容でも構いませんので奮ってご投稿下さい。

(新海 明)

日本蜘蛛学会

入退会は

事務局

525-0055 草津市野路町 1916

立命館大学理工学部生物地球科学研究室

吉田 真

Tel 0775-61-2660 (Fax 0775-61-2661)

会費の問い合わせおよび住所変更は

会計幹事

576-0043 交野市松塚 7-9

金野 晋

Tel (Fax) 0720-91-6701

年会費 正会員 7000 円 (学生は 5000 円)

郵便振替口座 00970-3-46745

遊絲 第3号

1998年11月25日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 西川喜朗
